第４回三軒茶屋駅周辺まちづくり会議（トークセッション）
文字起こし

※敬称略

00:05～登壇者紹介

世田谷区:　本日、三軒茶屋駅周辺のまちづくりに関わってきた 5 名の方に、ゲストに来ていただいております。第 2 部は、この個性豊かなゲストのみなさまとまちづくりに関する様々なトークを繰り広げていけたらなと思います。それでは、ゲストの方の自己紹介をお願いしたいと思います。

【00:31～】スライド 1/4

吉　田：　私の方から自己紹介をさせていただきます。三茶 WORK の共同代表を務めている吉田と申します。よろしくお願いします。普段はこの三茶 WORK という名前の通り、三軒茶屋でコワーキングスペースを運営しております。

【00:50～】スライド 2/4

吉　田：　場所は、三軒茶屋へ来たことがある方は皆さんお分かりだと思うのですが、西友の目の前の、茶沢通りの場所でコワーキングスペースをやっています。ここのコワーキングスペースは、まちの人たちが働く場所として使ってもらえるようにしよう、ということで作っておりまして、

【01:07～】スライド 3/4

吉　田：　作った経緯が、もともと私も三軒茶屋に引っ越してきた時に、都内のコワーキングスペースを使っていたのですが、三軒茶屋のまちにコワーキングスペース、働ける場所があるといいなというところで、それをまちの人たちに相談したら、それを作りたいねというふうなことになり、今、この三茶 WORK というコワーキングスペースを運営しております。また、もう 1 つ、コワーキングスペースに集まってきている人と一緒に協力しながら、SETACOLOR という取組みをしています。こちらは、世田谷に拠点を置く小規模事業者で、SETACOLOR に参加した方たちを世田谷のプロフェッショナルな人たちがサポートしよう、という取組みを世田谷区さんと一緒にやっていたりしています。

【01:52～】スライド 4/4

吉　田：　私自身も今、三軒茶屋の太子堂に住んでいるのですが、こういった地域の人たちと一緒に仕事をしたりプロジェクトがどんどん増えていくと、自分たちのまちの暮らしがより楽しくなるなというふうな取組みをしておりまして、今日の時間は、登壇する方々の、まちづくりに関するアイデアであったりとか、今日

ご参加していただいている皆さんの、三茶に対するアイデアというものを聞けるのを楽しみにしております。よろしくお願いします。次、杉浦先生お願いします。

【02:30～】スライド 1/6

杉　浦：　皆さんこんにちは。昭和女子大学の杉浦です。三軒茶屋にある大学です。専門は建築のデザインで、大学では設計やデザインの授業を行っております。

【02:46～】スライド 2/6

杉　浦：　ゼミでは、2000 年頃から実際にまちに出て、パブリックのスペースでポテンシャルのある場所を発見して、その場所性を生かしてみんなの交流空間になるような空間デザインを各地で行ってきました。その初めの頃にまず、大学がある三茶で、近くの生活工房の方から世田谷アートタウンという企画があり、これにお声がけいただき、キャロットタワーに、三茶で採集したまちの音風景の空間などを作っていました。これが 2000 年のころです。その後、世田谷トラストまちづくりの協力なども得て、瀬田の旧小坂家の庭に、国分寺崖線の地形を生かして「森のコンサート会場」を設計したり、北烏山の屋敷林にある農家の庭に、クモの巣のような休憩場所を設置したり、豪徳寺の商店街に縄文遺跡を出現させたり、さまざまな空間を住民などとともに、学生と一緒に作ってきました。また、大学周辺のエリアとしては、渋谷駅周辺などでもいろいろなことを行っていて、本の物々交換などをして被災地に送るプロジェクトなども行ってきました。ヒカリエでやった本の物々交換プロジェクトは、大学内でも、子育てフェスタで子どもの空間として、小さいサイズで作ったりもしています。

【04:02～】スライド 3/6

杉　浦：　これは少し飛ぶのですけども、2000 年頃から、「大地の芸術祭　越後妻有アートトリエンナーレ」のような、こういう地域を舞台とした国際的な芸術祭が日本でも開催されるようになってきて、私のゼミも 2003 年からずっと参加していて、これはちょうど中越地震があって主が亡くなってしまい、空き地となってしまった場所に鎮魂の意味も込めて、2006 年と 2009 年はこの豪雪地帯の雪をテーマに、ハンドクラフト、セルフビルドで地域の人々と一緒に空間を作ってこういう交流空間にしたというようなものです。みんなでこう作っています。

【04:53～】スライド 4/6

杉　浦：　これも同じく「大地の芸術祭」で、この時にはこの地域住民の人とずっと関わってきたのですけれども、地域の中心である、諏訪神社というのがあって、そ

の諏訪神社の奥には、豪雪で冬は入れなくなってしまう山の上に公園があり、そこをなんとかできないかというお話をいただいて、この場所は着物のまちでも有名なところなので、すごく巨大な反物のようなものがあるような空間を作って、一時の夏に、短い夏を楽しめるような光とか風とか影とかができるような空間でコンサートを行ったり、野生を表現するような形で、2018 年はそのようなものをやったりしていました。

【05:47～】スライド 5/6

杉　浦：　これは、被災地支援で熊本の地震の後、みんなで、世田谷で家具を作って本と一緒に仮設住宅の集会所に送ったりとか、今治でこういう、竹とそれから石材が残っていたので、これで月見の会をやれるような場所を山の上に作ったりなどしてます。

【06:13～】スライド 6/6

杉　浦：　これは、ちょっとおまけなのですけども、三軒茶屋とそれから十日町の関係があったところとお茶会をやり、このような形で 2 拠点をつないだりとかするようなプロジェクトを行ってきて、三軒茶屋といろんな地域が関係できる可能性というのもあるのではないかなというふうに思っています。以上です。

吉　田：　ありがとうございます。次に飯島理事長お願いします。

【06:40～】スライド 1/3

飯　島：　皆さんこんにちは、三軒茶屋銀座商店街理事長の飯島祥夫でございます。

【06:50～】スライド 2/3

飯　島：　三軒茶屋銀座は、三軒茶屋駅の北側の商店街で、茶沢通りを中心に、太子堂二丁目、四丁目に広がる商店街です。西友さんをはじめ、大型ドラッグストアや有名チェーン店、または、きらりと輝く個性的なお店が軒を連ねる、世田谷を代表する商店街だと自負しております。

【07:17～】スライド 3/3

飯　島：　来年度にはおかげさまを持ちまして、振興組合設立 50 周年、商店街発足 75 周年を迎えます。本当にありがとうございます。商店街活動って分かりにくい所があると思います。私たちの商店街のテーマは、たくさんのお客様に三軒茶屋に来ていただくこと、そして、地域コミュニティの担い手として地域の安心安全を守ることです。街路灯や消防設備の維持管理、清掃活動をはじめ、これらのテーマに沿って、商店街の中央にあります、ふれあい広場や日曜日の歩行者天国を利用して、サンバパレードや大道芸、地方自治体と組んだ物産展など、

いろいろな集客イベントを行っております。また、共生社会を目指して世田谷ボランティア協会さんやわんぱくクラブ育成会さん、男女共同参画センターらぷらすさんなど、いろいろな団体のみなさま方や、地域の大学である昭和女子大学、テンプル大学とも協力して活動を行っております。ふれあい広場を中心として、商店街が地域のハブとなり、いろいろな皆さんとふれあいを結び合うことが出来たら本当に楽しいと考えております。11 月には、東京都の主催で大東京商店街まつりというものがウェブ上で開催されます。東京都で 50 商店街が選ばれておりますが、三軒茶屋銀座商店街もこの大東京商店街祭りに参加することになりました。まちの歴史や活動紹介、そしてご夫婦でやっているお店のストーリーや、商店街の名物の販売などを行っていく予定になっております。これに伴って商店街では、ケーブルテレビの J:COM さんとともに商店街の紹介ビデオを作ったり、三軒茶屋をテーマとした動画のコンテストを 12 月頃に行う予定にしております。リアルでのイベントが制限されている中、ウェブでのイベントによる、三軒茶屋の露出拡大とキャッシュレスなどの商店街のデジタル推進を加速させる狙いも持っています。ウェブ上でいろいろなコンテストなどのイベントを開催致しますので、ここにお集まりのみなさま方にもどうぞご参加頂けたらと思っております。今後呼びかけさせて頂きますので、どうぞ、ご反応してくださいませ。よろしくお願いいたします。

吉　田：　飯島理事長ありがとうございました。では次に、松下副館長よろしくお願いいたします。

【10:04～】スライド 1/5

松　下：　みなさま、こんにちは。公益財団法人せたがや文化財団世田谷文化生活情報センターの副館長を務めております、松下でございます。よろしくお願いいたします。世田谷文化生活情報センターと言いましても、少し分かりにくいかもしれません。三軒茶屋のランドマーク、キャロットタワーの中にございます。大きく 4 つの事業部からなっておりますので、順にご紹介いたします。まず最初に、パブリックシアターでございます。

【10:37～】スライド 2/5

松　下：　パブリックシアターは、キャロットタワーの中に主劇場、小劇場ございまして、文化芸術の発信だけではなくて、地域や区民との関わりを大事にしたさまざまな事業を行っています。この画面の下側から順に、「三茶 de 大道芸」、「地域の物語」、こちらは障害のある車いすの男性が登場されています。右下がメインステージ。区民のみなさんが音楽やダンスなどのパフォーマンスを披露してくださる画面でございます。

【11:11～】スライド 3/5

松　下：　生活工房です。こちらは、新たなライフスタイルデザインを提案していく、そういう部門でございます。ここのワークショップなどの右上の画面では三軒茶屋のことをさまざまな観点から取材してご紹介をさせて頂きました。左下が世田谷アートフリマ。右下は子どもたちがいっぱい登場していますけども、リアルでは集まれなかったので子どもたちのテレ・ワークショップを開催したときの画面となっております。

【11:42～】スライド 4/5

松　下：　音楽事業部です。こちらは、固有の施設を持ってはおりませんが、三軒茶屋のみならず、区内各地に展開して良質な音楽を提供しています。画面の左上が、「Let’s sing ゴスペル！」、アメリカのホストタウンである世田谷区としての、アメリカ文化の紹介に努めたものでございました。真ん中、オリンピックが通常通りできていたら大活躍してくれたはずなのですが、子どもたちによるSetagaya 太鼓塾。右はジュニアオーケストラの交流コンサートです。台湾の高雄市の青少年オーケストラとの交流を致しました。下の画面は世田谷バンドバトル。区内のバンドが総結集して自分たちのパフォーマンスを演じてくれています。

【12:27～】スライド 5/5

松　下：　これが一番新しくできました、国際事業部でございます。世田谷線の三軒茶屋の駅直結でありますが、せたがや国際交流センターを昨年の 4 月からスタートさせています。まだ始まったばかりですけれども、右上の画面が多言語の絵本の読み聞かせ。左下の画面が、外国人と関わる団体のオープン情報交換会、右下が、センターの中での展示の状況でございます。今現在、船橋希望中学校の子どもたちがアメリカの選手団を歓迎するために書いてくれたさまざまな世田谷紹介の情報発信などを展示させて頂いております。このような形で幅広く地域や区民のみなさまとの関わりを大事にしながら、文化芸術というものを大いに広げていきたいというふうに感じております。

吉　田：　松下副館長、ありがとうございました。続いては、萩野さんお願いします。

【13:27～】スライド 1/2

萩　野：　萩野 正和です。株式会社 connel の代表をしておりまして、三軒茶屋駅周辺のまちづくり検討委員会のメンバーを務めさせていただいております。僕は基本方針からお手伝いをさせていただきました。

【13:44～】スライド 2/2

萩　野：　普段は、地域づくりの事業のプロディースからマネジメントさせて頂いておりまして、三軒茶屋に限らず、個々にはご説明できませんけども、今、皆さんの方にお見せさせていただいているような、いろいろな地域の方々と、空間づくりだとか、場づくりっていうことを中心に、その地域の賑わいづくりをさせていただいております。今回そういった観点で三軒茶屋のまちづくりへ、いろいろと力を注ぎ込ませていただきました。そんなお話も今日できたらと思いますので、よろしくお願いいたします。

世田谷区:　みなさんありがとうございました。本当に多種多様なご経験をされている方ばかり、いろいろまちづくりの話を深く聞いていきたいです。それでは、トークセッションに移っていきたいと思います。本日は仮称「三茶のミライ」の素案を受けて、まちや人とのつながり、それから、空間の利活用、新たな空間創出という視点で、2 つのテーマでみなさんにお話しいただきます。1 つ目のテーマは「三茶のミライ」とご自身の活動についてです。ここからは進行を、先ほど自己紹介にありましたように、三軒茶屋にいらっしゃる三茶 WORK の吉田さんにバトンタッチしていきたいと思います。吉田さん、お願いします。

14:42～トークセッション１：「三茶のミライ」策定の感想

吉　田：　ではバトンを受取りまして、ここからトークセッションを始めていきたいと思います。今日は私も含めて 5 名の登壇者の方と、まずはトークセッションをしていくのですが、そのトークセッションをしていく目的としましては、最後、皆さんと意見交換であったりとか、三茶のまちをもっと面白くしていくためのアイデアをたくさんいただけたらなというふうに思っていて、そういったアイデアを最後に出していくためのトークセッションをしていきたいなというふうに思っています。今日、最初に「三茶のミライ」の説明も、世田谷区と坂井先生の方からありましたが、基本的に「9 つの未来像」というものが提示されているけれども、それを実現していくのは行政だけではなくて、市民と行政がともに作っていくという、僕らが、住んでいる人たちも主体となってやっていくというところが、この計画の大きな特徴であったり、僕らにも求められていることなのではないかなというふうに思っています。そちらについて、まずは、とは言え市民と行政が協働してとか、「参加と協働」という言葉とかもありましたが、具体的にそれって僕らはどういうふうに取り組んでいったらいいのだろうかというのも、是非一緒に考えていけたらな、というふうに思ってこのトークセッション、時間を設けられればなと思っています。そういったところにつなげていけたらなというふうに思っているのですが、最初に、お三方にそういったことも含めて、この「三茶のミライ」の、この内容について少し感想で

あったり、ご自身が活動されている中で感じていることについてお伺いできればというふうに思っています。そんな形で進めていきたいと思います。最初に、飯島理事長にも少し感想をお伺いしたいなと思うのですが、やはり三茶のまちの面白さは、もうすでにコメントをくれている方もいますが、良いカフェがあったり、飲み屋があったり、そういった飲食店だったり、商店街の面白さっていうのが、まちの 1 つの個性だったり、魅力を形作っているかなぁと思います。その辺りも含めて、この「三茶のミライ」のご感想、是非お伺いできればなと思いますが、いかがでしょうか。

飯　島：　吉田さんからの話で、今三軒茶屋を取り巻く 1 番の問題はコロナなのですけれども、それとともに今、渋谷の変化がすごいですよね。どこが何なのかわからないくらいの再開発を行っています。すごいなという反面、あのような巨大なショッピングセンターを中心にリアルな生活をしている人が生きていけるのかなというふうに思ってしまうわけです。渋谷を立派なメロンに例えるとすれば、三軒茶屋は一粒一粒が輝く葡萄のような存在でありたいかなというふうに思っております。三軒茶屋のまちに来る人が、それぞれの個性に合わせた個性豊かなお店を拠点に、三軒茶屋のまちを好きになってくれる、三軒茶屋のまちにそういう拠点の集まることが、職住近接の三軒茶屋のまち、本当の最大の売りなのではないかというふうに私は思っています。商店街はその豊かな粒を結ぶ枝の役割をしていきたいなというふうに思うわけです。商店街だけでなく、いろいろなみなさまが、三軒茶屋を通してビジネスでも、そうでなくても繋がり合っていくことが大切ではないかというふうに思います。いろいろなお店や企業が三軒茶屋という場からリアルでもウェブでも地域から日本や世界中へと発信できるような、そんなまちの中心になっていけばいいのかなというふうに思います。人が集まるということは良いこと、悪いこといろいろあるかもしれませんけども、人と人とが触れ合うことによって、新しいアイデアが生まれたり、地域の活性化になっていくのだろうというふうに思っている次第です。早くコロナも抜けてくれることを祈るばかりでございます。以上です。

吉　田：　飯島理事長、ありがとうございます。葡萄のような存在というのが結構印象的で、本当に三茶って、いろんな個性があるお店が集まっているところがやはり魅力だなというふうに思いました。

飯　島：　しかも、豊かな輝くものが集まっていると思っております。

吉　田：　ありがとうございます。松下副館長にも聞きたいのですが、やはり三茶の 1 つの大きな魅力として、アートが暮らしの近くにあるっていうところかなと思っていまして、今回のこの「三茶のミライ」についてもどのように考えていらっ

しゃるか、是非教えてください。

松　下：　文化財団の事業の、非常に大きな 1 つとして「三茶 de 大道芸」というのがあります。今、私の顔の横にフライヤーを出していますけれども、これは劇場の中だけで演劇やダンス、音楽などを展開するということではなくて、劇場の外に飛び出していこうという、こういう旨の発想で、すでに開館当初から行っておりますが、今年で第 25 回ということであります。今お話しくださった飯島理事長も、実は一昨年の実行委員長で、今も実行委員を務めてくださっています。この事業自体が私ども文化財団だけではなくて、まちの方々と一緒に、9 つの商店街が結集して、地元の町会も加わってくださり、さまざまな形で知恵を絞って、汗をかいていただきながらやってきました。残念ながら、去年はこういう状況でございましたので、大道ではなくて、劇場の中での開催、今年も残念ながら同様に劇場の中での開催というふうになりますけれども、この事業を行うにあたって、実は杉浦先生の昭和女子大学のみなさまにもすごくお力をいただいて、ボランティアの方が大人から子どもまで 100 人以上の方が集まってくださっています。こうやって 1 つの大道芸というフェスティバルを、私ども文化財団だけではなくて、地域の方々が一緒に作り上げていく、まさにこれがまちづくりそのもので、この実行委員会を、当財団だけでなくてまちの方々も含めてみんなで、アートタウン実行委員会という名前で毎年行っています。その名前がまさに物語っているのかなと。三軒茶屋はアートのまちであるということを地域の方々は常に意識をして行動をとっていく。それはとても素敵なことだと思いますし、今年はインドアでしかできませんけれども、そういう形ではあるけれども、しっかりと続けていきたいと思っております。

吉　田：　松下副館長ありがとうございます。この話は、未来像 1 の「歴史を継承しアートを生み出していくまち」というところに直結する話かなというふうに思っているのですが、今お話を聞いていて、やはり歴史を継承しながら生み出していくというときには、まちの人たちと一緒に作っていく、共存しながらやっていくというところが結構大きなキーワードになるのではないかなというのは、お話を聞いていて、そうなのだなというふうに思って聞いておりました。ありがとうございます。あと、是非、杉浦先生にもお話伺いたいなと思います。杉浦先生も、まちの空間を使ってまちの人たちと作品活動をされていたり、まちや空間をジャックしている、と僕は印象を持っているというか、そういった活動されている中で今回の「三茶のミライ」というものをどういうふうに捉えられていますでしょうか。

杉　浦：　はい。ありがとうございます。ちょうどこのまちづくり会議の委員としても、ずっとこの策定から関わってきていて、凄く綺麗にこれがまとまっているの

で、すごく堅い感じになって見えるのかなというふうに思いますけれども、多分ですね、ここからがスタートというか、今までは、企画書の段階であったものが、ようやくここからアクションに移っていくというのが今かなと思っていて、ここから本番だというふうに思っています。それでですね、今お話があったように、私もずっとその「パブリックスペースの活用」ということがずっと気になっていて、いろんなことでやってきたのですけど、さきほど、空間をジャックするとか、少しゲリラ的な要素もあって、結構過激にやってきたところはあるのですけれども、やってみるとそのパブリックなスペースっていろんな決まりがいっぱいあって、本当にいろんな許可を得なきゃいけないっていうことがあります。でも、それをやっていく中で、そこにある、目に見えないいろんなルールと戦ったり、そしてそれをやっていくうちに、いろんな人を巻き込んでいったり、ご協力を得たりというふうに、何かちょっとしたアイデアとか、ポテンシャルから何かやったらいいのではないかなというささやかな気持ちみたいのが、何かすごく、ちょっとアクションを起こした時に、とにかくムーブメントなんかを起こすと、波を起こすと、やはり反応がすごくあるというのは、良くも悪くも面白いところかなというふうに思っています。学生の設計製図の授業とかで、ほかの先生たちもいつもですね、三茶が近いからテーマでやっていると。学生たちがリサーチをしてきます。三軒茶屋の魅力ってものすごく、みんなとてもはまって、どこにもない、何と言うか、ここにしかないキャラクターを持っている。さきほど商店街の話もあったのですけど、やはりレトロな感じの商店街があるところがものすごく魅力で、1つずつの個性が際立っているところも面白い。そういうところを学生が学習して、何かそれを継承したいという気持ちが、みんなの中にはとてもあったりする。少し残念なところは、そのパブリックスペースが、やはり休憩場所がないとか、ちょっとした無料で休めるところがないというのが、学生の苦情の中で1番でてきて、そういうのはやはり解消したプロジェクトにしたいという希望がとても出てくるのです。そういうのを見ていると、三軒茶屋があって、いろいろやってきて思うのは、何かそういうみんなでくつろげて交流ができる、ちょっと余裕のある空間、なかなか余裕を作るのは大変なのですけど、それでもちょっとした工夫をすれば、そういうスペースができるのではないかなというふうにとても思っていて、私の目には、まだまだいけるというか、ポテンシャルのある面白い場所があるのではないかなってすごく思っていて、是非皆さんと力を合わせてジャックしていきたいと思っています。

吉　田：　杉浦先生ありがとうございます。三茶のまちにはやはりまだ可能性があるかもしれない、ということですね。面白いですね。ちょうどたまたま三茶 WORK に昭和女子大学の学生の子が来てくれてですね、三茶の飲食店が本当に素敵だから、そういうのを自分たちの学生にも発信していきたい、そういう取組みをま

ちのためにもしていきたい、ということを言ってくれた学生さんたちが相談しに来てくれたのですが、やはりそういう小さいアクションというのが、結果積み重なると、まちの魅力に繋がっていくのだなというのを今、杉浦先生の話も聞いていて感じております。あと、萩野さんにもお伺いしたいのですが、今回こういった形から、小さいアクションが大事だよとか、「タクティカル・アーバニズム」というような言葉も坂井先生からありましたが、いろんなまちづくりを手がけていらっしゃる萩野さんから見て、今回の計画の特徴的なところや、他の地域と違うなと感じることなどがもしあれば、教えていただきたいなと思います。

萩　野：　はい。ありがとうございます。だいたい、三茶の状況はもう聞いてる皆さんも、あと、今皆さんがお話しいただいた内容でだいたいわかるとは思うのですけども、決して悪い意味ではなくて、すごい濃いメンバーが、もうすでにいらっしゃると思うのですね。なので、既にもういろんな動きがすごい動いているところもあると思うので、逆にこう何と言うのでしょう、先ほど葡萄の話がありましたけど、葡萄のように一様の粒ではなくて、いろんな形をしたような違った粒でもあると思うのです。粒ぞろいというか。なので、紫の普通の葡萄もあれば、シャインマスカットもあればみたいな、皮まで食べられちゃうものもあればみたいな感じで、いろんな個性があるっていうのが、すごいまちの特徴としてあると思うので、その中でまさに今ご質問ありましたけれども、こういった計画を作らなきゃいけないという時に、やはりなかなか一辺倒にまとめられないのが、もう皆さん感じてるところだと思うので、そこの部分で、やはり先ほど吉田委員からも、もしくは坂井先生からもありましたけれども、小さな活動でこう動いていって、大きなうねりにしていくなんていうときには、やはりあっちらこっちらが違う活動していたって、何も大きなうねりが生じませんよね。なので、その意味でもちょっと合っているのかどうか、もしくはわからないかもしれないですけども、1 つの方向性というか、今あるものの整理を含めて見せていく必要があるとは思うのです。それが、まさに今回の「三茶のミライ」だったと思うのです。その「三茶のミライ」に関して、誰かがこう、僕らみたいな外から来た人達だけで作るのではなくて、実際にまちの強みをわかっている、充分に肌で感じている人たち、100 名ぐらいワークショップでは参加してもらいましたけれども、まさにまちぐるみで作ったっていうところはすごいこの計画、なかなかできない、もう粒ぞろいが 100 名集まるものですから、なかなかまとまらないのは皆さんご想像にあると思いますけども、それを力作で今回まとめたというところが 1 つ、大きいかなと。もう 1 つはちょっと短めで、もう少し話させてもらえますけども、坂井先生が、時代がこう変わっていくというところがあったと思いますが、早く、今どんどん変わっているというところがあると思いますが、その部分にもやはり対応して、この計画も、今は

こうだけれども、もしかしたら今回のコロナもそうですけども、すぐにこう変化が起きる時代になっているので、そこはちゃんと対応していこうと、すぐに。基本方針の方には、確か書いてあると思いますけども、更新を、アップデートを絶えずしていきましょうというような計画になっています。なので、そういう変化にすぐさま対応できるような計画にしたところは僕が知っている中でもなかなかないのではないかなと。また、そういったことに対応してくれる、理解度のあるようなまち場の人たちもいらっしゃるというところは非常に、計画と一緒になって進んでいく推進力になっていくのではないかなと思っています。

吉　田：　ありがとうございます。100 名集まって 4 回ぐらいまちづくり会議をして作るという事自体が特徴的で、一緒に作っているというところも大きく特徴的だねというふうなことに、僕は受け取りました。確かに今回のこの「三茶のミライ」というのは、ある意味未来像が示されていて、こういう状態になったらいいよね、そこに向かう先は多分いろいろあって、そこは時代の変化に対応しながら目指していったらいいかもしれないし、もしかしたらそこのところは行政がトップダウンで作っていくのではなくて、住んでいるまちの人たちが関わりながら作っていくということが大事なのかなというふうに思いました。皆さんの感想を聞くと、ますます僕も、なんか三茶でやりたいなという、やる気が出て来てはいるのですが、次のもう 1 つのテーマに入っていきたいなと思います。

32:00～トークセッション２：三茶での参加と協働による持続可能なまちづくりを広げていくには

吉　田：　2 つ目のテーマとして、世田谷区事務局の方から言われている「三茶での参加と協働による持続可能なまちづくりを広げていくには」という堅めなテーマになるんですが、これは僕の解釈では、先ほど質問の方でもメッセージを下さった方がいたのですが、ここの意味は、ただ住むだけのまちじゃなくて、一員としてのまちの活動と関わりながら暮らすといろんな人と繋がって豊かな生活になるよね、というコメントをいただいているのですが、まさにこういうことかなというふうに思っていて、ただ住む、それはそれで楽しいけど、まちの活動に関わりながら暮らしていくと、まちもより良くなるし、自分の暮らしも楽しくなるよねと。この「参加と協働による持続可能なまちづくり」っていうのは、そういうことかなというふうに思っています。三茶 WORK の事例になってしまうのですが、三茶 WORK を始めてすごいびっくりしたことは、三茶 WORK ってまちに住んでる人たちが使ってくれているワークスペースなんですが、本当にいろんな職業の方とか、いろんなスキルを持った方たちがワークスペースに

集まってくれてですね。例えば、ウェブのエンジニアさんだったりとか、デザイナーさんだったりとか、建築家の方だったり、あとはフリーの保健師さんがいたりとか、スポーツトレーナーの方がいたりとか。本当、まちにはいろんな人が住んでいるのだなと思っていて、なんかそういう人たちと一緒にまちを作っていくと、外からわざわざ有名な人を呼んで来なくても、自分たちが作りたいまちって作れるんじゃないかなと思うぐらい、まちにはいろんな経験だったり、スキル持ったりしてる方たちもいますし、そういった方たちと一緒にプロジェクトだったりとか、取組みができるんだなぁっていうのは、三茶 WORK を運営しながらすごい日々感じていることかなというふうに思っています。そんなところで、おそらくこれは参加している皆さんも、三茶で何か仕掛けていけたらいいなというところであったりとかもあると思うのですが、ここに今日登壇している 4 名の方で、是非三茶でこういう取組み今後したいんだよなとか、こういうことにチャレンジできるといいなというようなことを持っていることが、もしある方がいたら是非、教えていただきたいなというふうに思うのですが、名指しになってしまいますけど、飯島理事長、さきほど大東京商店街まつりの話とか、もしあれば教えていただきたいです。

飯　島：　大東京商店街まつりは J:COM さんと一緒になって 1 つ動画を作りたいと思っています。これは三軒茶屋で生活する、35、6 歳ぐらいの女性をモデルにして、一日のところでこういうふうに考えたら、三軒茶屋での理想的な生活なのかなというものをまず打ち出して、基本皆さんが画像を貼り付けていくような、いろんな、こういうところがいいとか、こういうところが便利とか、こんな所へ行ってみたらというようなところを貼り付けていくような「動画のツリー」を作りたいというふうに考えておりまして、これは 12 月ぐらいに動画の教室を商店街に呼んだりとか、いろんなお考えの方たちの話を集めたりというような作業をしていきます。1 月、2 月、という感じで、できれば私たちの 50 周年のときにそうしたツリーを完成させて、見せていきたい。それがきっと三茶の未来につながっていくのかなというふうな考えをしています。以上です。

吉　田：　ありがとうございます。それは、「三茶のツリー」というものをまちの人たちと一緒に作っていけたらいいなという事でしょうか。

飯　島：　はい、作っていけたらいいなと思っています。だからいろんな人たちが集まってきて、そこに YouTube の動画を張り付けてくれたら、いいなと思います。さらにたくさんの数が集まってくれたらなと思います。賞品も今考えてます。

吉　田：　飯島理事長と以前お話した時も、商店街の魅力をちゃんと外の人にも発信していくのが大事だよねというお話をされていて、そういった時に多分、商店街の

人が、発信してるとちょっとヤラセっぽいという感じになりますよね。そういう部分がある中で、まちに住んで自分たちが好きな人たちがそういうふうに自由に発信していく機会とかがあると、それは外にリアルなものとして伝わっていくかなと思います。

飯　島：　商店街のことだけじゃなくて、お祭りでどうしたら御神輿かつげるのかとか、それから、日曜日に住民票を取るのはどこに行ったらいいのかとか、そのようなことを張り付けていくと商店街や、三軒茶屋の深い部分がわかりやすいものになっていくのかなというふうに思います。

吉　田：　ありがとうございます。その流れで、三茶 de 大道芸も結構関われるチャンスあるよ、という話も先ほどあったのですが、松下副館長も今後、三茶で何かこういうことを仕掛けていきたいなとか、もし考えていることとかがあれば、是非教えてください。

松　下：　はい、実は三茶 de 大道芸、昨年の 10 月にやりましたが、屋内での開催でした。やはり、今まだウィズコロナという状態でアフターコロナまで、考えがなかなかおよびにくい中ではありますけどれも、コロナになる前は三茶 de 大道芸に 2 日間で 20 万人のお客さまがいらした。去年はというと、2 日間で 3000 人です。やはり屋内でやるということの制約、ボランティアの方々と手作りで何かをやりたいというその思いで頑張ってやろうと思えば思うほど、密を避けられない。こういう厳しい条件の中で、少しずつウィズコロナであったとしても、できることというのを模索して、今回も本当だったらスタンプラリーみたいなことをやりたいのですけれども、そうすると接触が避けられないということで、それに代わるプログラムとして、まちなか探検隊という、三茶 de 大道芸の 2 人のキャラクターがいるんですけども、サンチャとダイド、この 2 人をまちの中の商店街の中でかくれんぼしてもらって、そこを親御さんとお子さんが一緒に探して見に行こうと、そして見つけてくれた人には、何かのグッズを差し上げる、というようなことなども商店街様とお知恵を絞りながら進めていこうとしています。なかなかパフォーマンスができないのでそれに代わるものとして、このパフォーマンスの風景を写真館という形で商店街の中に展開したい。これがいつまでもこういう形が続くというのは我々にとっての本意ではないんですけども、それでも何らかの形でアートの灯を消さないという想いで、実行委員会の皆さんも一生懸命頑張って知恵を出してくれています。全国では大道芸フェスティバルのほとんどが去年から止まっていますが、そういうインドアな形で、ようやく世田谷が去年から再開して、先日横浜の野毛大道芸も、去年の世田谷と同じようなやり方で、ようやく再開をしました。こういうものは継続が大事だと思っていますので、やはり今の世の中に合った形で、工夫し

て制約がある中ではあるけれども、その灯を消さないようにという、ムーブメントをつなげていくということは、私ども文化財団だけでは到底できることではありません。地域の皆さん、いろんなつながりというものを大事にしていく、いずれそれがいろんなことができる状況になってきた時に備えて、今、備えておく時かなという風に私は感じています。

吉　田：　ありがとうございます。今日聞いていらっしゃる方の中にもやはりアートが、この三茶のまちのアートが好きで、この灯を閉ざしたくないという方もいらっしゃるかなというふうに思うんですが、そう思っている方がもしいらっしゃったらあれですかね。とりあえず世田谷アートタウン事務局に、こう、ちょっと連絡したりするという、何か関わり方ってありますか。

松　下：　はい。今回はアートタウンの、フェスティバルに参加していただくパフォーマーも、ボランティアもすでに締め切っている状態でございますので、今後のつながりという点ではそれも 1 つですし、昨年も行ったのですけれども、世田谷区が今、アートが非常に厳しい状態だということで、去年、アーティスト支援事業というのを行ってくださったのですね。区の文化振興基金という、ある種の「貯金」ですけれども、これを半分放出しまして、世田谷区内のアーティストの方々、何とか自分たちのパフォーマンスをやりたいという思いをお持ちの方々がそれを発表する、また、配信のような形で展開をしていくというところで私共も一緒に共同で参加をさせていただいて、多くの感謝のお声やご評価もいただきました。区の方でもこれの第 2 弾の用意もしてくださっている（注：募集期間 10 月 4 日～15 日）ということで大変力強く思っております。そういった支援事業など、世田谷区でもそうですし、東京都でも積極的に行ってくださっている、私共、文化財団だけではなくて、さまざまなジャンルで支えていこうという、そういう動きがございますので、そういったところも含めてできれば応援していただければというふうに思います。

吉　田：　ありがとうございます。杉浦先生と萩野さんにもお伺いしていけたらなというふうに思うのですが、こういった、さっきまちの空間を使って何か取り組みたいとか、まちに対して何かしていきたいって思っている方も、ここに今日参加している方にも多いのかなというふうには思っているのですが、そういった方たち、僕も含めてどうやったらいいんだろうかって分からなかったりとか、どこから始めてったらいいんだろうっていうところとかは悩む部分もあるのかなと思ってます、と。そういったところに関して、杉浦先生のこれまでの活動でこういうふうなやり方をしてきたよとか、こういうことが大事なんじゃないかなと思うことがもしあったら、教えていただきたいなと思うのですが、いかがでしょうか。

杉　浦：　ありがとうございます。お教えするような偉そうな事はないのですけど、やりたい気持ち、これに尽きるかなと思っていて、自分の身近なところで、あれおかしいなあとか、もっとこうなんないかなとか、まち歩いてたり、何かしてるとふっとこう思う瞬間がみんなあると思うんですよね。次にそれをやるかどうかってところにちょっとハードルがあるんだけど、やればいいんじゃないかなと思うわけなんです。公共のスペースはみんなの空間で、これは行政の方でいろいろやっていただかなきゃいけないところって、やはりいっぱいあるのだけれども、なんかそれをこうアクションというか、もっとこうしたいっていうのを単にこう訴えるだけじゃなくて、こんなふうにやれるんじゃないかなっていう社会実験みたいなことをやってみる。それをやらせてもらえるというところ辺りがちょっとゆるくなるとすごくいいなあっていうふうに思っていて、今までやはり厳しくて、皆さんの年代がよく分かんないけど、例えば竹の子族とかが原宿で踊ってたりとか、昔そういう、なんですかね、自由にこう、いろんなことをやれていた時代があったんだけども、どんどん厳しくなってしまって、規制の中に今ある。特に公園とかそういうパブリックな道路とか、そういったところをいっぱい活用できる場所があるんだけれども、決まりがいっぱいありすぎてできなくなっている。それをちょっとだけこういうふうにやったらどうかな、みたいな提案を、どんどん出せば良くて、というかやってみればいいのかなっていうふうにも思っていて、何かそういうふうに、三茶には大道芸もやってたりとか、それからすごい意識が高い面白い人たちが本当にいっぱいいるまちなので、やれるのではないかなと思っていて、私から言えることは「みんなやりましょう」ということですかね。

吉　田：　ありがとうございます。やりたい気持ちを行動に変えちゃおうよ、ということかなというふうに思いました。僕も茶沢通りは毎日歩行者天国になってほしいなと思って、ちょっと社会実験的にチャレンジしてほしいなぁという声を上げていきたいなと思いました。萩野さん、今の辺りでチャレンジしてくるっていうところで、僕は結構１人でやるの大変だと思うので、仲間を集められるといいな、と。コメントにも住民以外の参加の裾野を広げていくみたいな、裾野を広げるみたいな話とかも大事かな、というふうには思って先ほど杉浦先生の話も聞いてたんですが、萩野さんはこういうふうに「参加と協働のまちづくり」って言った時に個人の意識だったりとか、やり方としてどういうのが重要だと感じられてますか。

萩　野：　はい、ありがとうございます。今、杉浦先生にお話しいただいたこともちろん非常に重要だなと僕も思ってまして、１つはやはり、そういった社会実験も含めて、公共空間の活用、非常に今いろんなところでも道路の活用という、公

園の活動っていろんなことやってますけれども、やはりその社会実験だとかなんかも含めて、やってみて、やってみた様を見せるっていうことが１つ多分大事だと思うんですね。やはりやりたい、こういうことやってみたいと思ってるんだけど、どうやったらいいかわかんないというコメントありましたけども、まさに、アイデアを持ってる人は結構いっぱいいると思うんです。そういう人たちに、こういうふうにやったら、こんなふうにできるよ、こんなふうにやったら少し面白い風景ができるよっていうことは、見せることは非常に大切だと思うんです。ただ、見たところで、すぐになんかなかなかできませんね。だから出来ないからこそ、それこそ松下副館長がサポートしていただけるんでしょうけれども、そういった窓口はすでに用意されてますよと、あとはやはり一緒に活動していく際に、吉田さんでもいいと思いますが、お兄さん的なね、一緒にこうなんか考えてくれたり、そういった相談ができるような場所というか、ちょっと三茶でなんかやるといったときに、ふらっと立ち寄れる場とかですね。そういうような場所づくりというか、そういう窓口、インフラというのが必要なのかなと思います。あとはルールとかですね。道路を活用するルール。僕も仕事で柏駅の駅前のデッキの活用をやったりしてますけれども、そういったルールが浸透してくれば、自然にやっていいんだという雰囲気も出てきますし、やっていく中で、そういうふうにやらなきゃいけないかなということも同時に浸透できたらなというところが１つあるのと、あとやはり、そのルールとかそういう場、人のつながれる場っていうのも必要ですけれども、実際にやれる場所、そういう場所と、まさに本当にまちなかの基盤というか、そういったやれる場所を用意するという、今日区長の冒頭の話にも、なかなかつながりにくい特性の都市構造してますよ、というお話ありましたけれども、どうやって場所を作っていくかというところも非常に今後、その活動と、その活動を受け入れる受け皿としての場所、それをどう作っていくかということも同時に考えていかなきゃいけないのかなと思っています。

吉　田：　ありがとうございます。そうですよね。やれる場所だったり、ルールっていうのはそういうのももっとこう、フランクに世田谷区と一緒に話せたりとか、僕らも相談行けるっていう形ができるといいのかなというふうに思いました。ちなみに三茶 WORK は「三茶のまちで妄想を形に」っていうのがコンセプトなので、妄想を持ってる人のご相談を受けるってのは、自分たちの義務だと思っているので、是非妄想を持っている方はですね、三茶 WORK にも相談に来てくれたらというふうに思っております。

萩　野：　では、あとは場所だけですね。

吉　田：　そうですね。ちょっと場所を一緒に作っていければなというふうに思っていま

す。もう少しお話を聞いてみたいなということがあったのですが、時間も迫ってまいりましたので、一旦トークセッションはこれで締めさせていただいて、後半部分は、ここに今参加している皆さんから未来像への関心だったり、取組みアイデアだったり、質問というものを伺えたらなと思っていますので、一旦これで休憩を挟むという形になると思います。